

# 英語反義語の認知意味論的考察\*

松本 曜

神戸大学

## 1. 始めに

反義性(antonymy)は、語と語の意味関係に基づいて語の意味を定義づけようとした、かつての構造意味論において重要視された意味的現象である。一方、語の意味を概念化の問題として捉える近年の認知意味論においては、反義性は中心的課題としては取り上げられておらず、いまだに多くの言語学者は無意識的に構造意味論的な発想によって反義性を理解しているように思われる。

この論文では、認知意味論的な観点から反義性について考察する。関連する研究の主張を吟味しながら、次の点を主張する。1)反義性には典型性があり、より典型的な反義語からそうではないものまで、程度差が認められる。2)典型的な反義語であると判断される重要な要因として、方向性の対立がある。3)反義性の判断には、事物に関する一般的知識が関わる。この3点を示すために、アメリカ英語話者を被験者とする、英語の反義語に関する実験結果を報告する。

## 2. 反義性に関する諸研究

反義性に関しては、今までどのような研究がなされてきたであろうか？

語と語の意味関係(sense relation)を重視する構造意味論(Geckeler 1971, Lyons 1968, 1977, Leech 1974など)においては、反義性は重要な意味関係の一つと見なされ、それをを用いて語の意味を定義することが行われていた。その反義性自体に関する研究もある程度のことが行われ、特にそのタイプ分けに関心が向けられた。たとえば、反義語として考えられるmale/female, big/small, husband/wifeの三つを比べると、male/femaleが程度を含まない対立であるのに対し、big/smallにはそれが含まれている。また、husband/wifeは、二者間の関係が逆転している。このような違いに基づき、いくつかの分類が提案されてきた。たとえば、ライオンズは、反義語を相補性(complementarity)、狭義の反義性(antonymy)、逆向性(converseness)に分けた(Lyons 1968)。リーチは、反義語などに含まれる意味的対

立を、分類的対立(taxonomical opposition)、極性的対立(polar opposition)、相対的対立(relative opposition)に分けた(Leech 1974)。いずれの場合も、先の三つの語が3分類の代表的な語である。一方、パーマーは、反義性を、狭義の反義性(antonymy)と関係的反対性(relational opposition)の二つに分け、前者をさらに程度的なものと同補的なものに分けている(Palmer 1976)。(ここで見るように、反義性(antonymy)という用語は意味が反対であるすべてのケースのカバータームとして用いられる場合と、特定の場合(程度的反義語)をさして用いられることがあり、用語が混乱している。この論文では、反義語という用語を、意味が反対と見なされるすべてのケースをカバーするものとして用いる。)

構造意味論における反義性の議論には、いくつかの限界があった。一つは、扱うことのできる反義性のタイプが限られることである。構造意味論の中で最も扱いやすいものは、male/femaleのような相補的(二項対立分類的)ペアであり、構造意味論が設定するプラス・マイナスの値を取る意味素性によって明瞭に表示された。そのため、このタイプの反義性が代表的な反義性であるかのように考える傾向があったように思われる。これに対し、buy/sellのように、意味の記述にフレームを必要とするような語(Fillmore 1982)における反義性は、反義語研究の中心的なものとしては扱われてこなかった。このほか、たとえば、heaven/earth, tighten/loosen, start/finishのような反義語をどのように分類するののかについても明らかではなく、提案された分類が網羅的なものかどうかは疑わしい。

また、構造意味論の反義性研究においては、取り上げられることがなかった重要な課題もある。ひとつは、反義語として見なされるものの中で、反義語らしさに程度差があることである。これは後で見るように経験的な事実であるが、言語カテゴリーを離散的なものと考えていた構造意味論においては、そのような程度性が注目されることはなかった。さらに、なぜ特定の単語ペアが反義語だと見なされるのか、その動機付けの問題も扱われてこなかった。これは、反義性が単語間の関係として捉えられ、背後にある概念的な対立に目が向けられていなかったためと思われる。

反義性は言語コーパスを用いた研究の中でも注目を浴びてきた研究課題である。研究されてきたのは、反義語のテキストにおける分布である。たとえば、反義語は、同一の文の中に共起する確率が高いことなどがわかっている(Justeson & Katz 1991, 1992)。また、反義語は特定の統語的フレーム(not A but Bなど)の中

で共起しやすいことも指摘されている(Mettinger 1994, Jones 2002)。ジョーンズはそのような観察に基づき、反義性とは、特定の語が反義語と関連するフレームに起こることを言語習得者が観察することによって習得されるものであるという主張をしている(Jones 2002)。

これらの主張における大きな問題点は、指摘されてきたような反義語の分布が、反義語と見なされない単語ペア(coffee/teaなど)でも見られることである。この点はJusteson & Katz (1992)も気がついている問題であるが、結局のところ、coffee/teaのようなペアと反義語とをどのように分布上区別するか、という問題は未だに解決していない。このことからわかるのは、語の表す内容を無視して、分布のみから反義性を考察することには限界がある、ということである。

これに対し、語の意味を一般的な認識との関わりで見る認知意味論においてはどのような研究がなされてきたであろうか？ 認知意味論的発想によれば、反義性とは語と語の関係と言うよりは、基本的には背後にある概念的な対立を反映したものと考えられる。このような立場からの反義性の研究も、認知意味論の中心的課題としては取り上げられてこなかったように思われるが、それでも全くなかったわけではない (Cruse 1992, Cruse & Toggia 1995, Croft & Cruse 2004, Paradis 2001, Vogel 2004)。

特に注目すべきは、クルーズの研究である。クルーズはかつては構造意味論の立場から語の意味関係を研究してきたが(Cruse 1986)、その後、認知意味論的な色彩の強い研究へと移行している。そのクルーズは、反義語にはどれぐらい良い例であるかに関して程度性があると主張し、その程度を決めるものとして4つの要因を挙げている(Cruse 1986, Croft & Cruse 2004)。まずは、「内在的二項対立性」(intrinsic binarity)である。これは、二項対立をなすものでも、それが現実世界の実状によるものではなく、論理的に二つの可能性しかないような場合に、高い反義性の程度が得られるというものである。たとえば、(イギリスの)バスにはsingle-deckerとdouble-deckerの二つしかないが、これは世界が変われば変わりうるものである。このような場合は、内在的な二項対立をなさないために、反義性の程度が低いのだという。二つめは「対立の純粋性」(‘purity’ of the opposition)である。これは特定の概念的対立が反義語に関与する場合、他の要素が語の意味に含まれていると反義性の程度が低くなる、というものである。たとえば、同じ性別の対立に基づくものでも、male/female, man/woman, aunt/uncle, convent/monasteryという順で反義性の程度が低くなる。これは、性別以外の要素

の存在のためであるという。三つ目が対称性(symmetry)であり、large/tinyが large/smallよりも反義性の程度が低いのは、大きさのスケール上で対称的位置にないためであるという。第四は、非命題的特徴の一致(matched non-propositional features)であり、レジスター的特性が一致している方がより反義語らしいというものである。

これらは、興味深い仮説ではあるが、実験的な根拠は示されていない。

このような反義性の程度に関しては、認知意味論とは異なる流れの中で、荻野・野口 (1988, 1996)による興味深い実験調査が日本語の反義語ペアに関して行われている。荻野・野口は、「反対語意識」という観点から、どのような単語ペアがどの程度はっきりと反対語として意識されるかを、大規模なアンケート調査により明らかにしている。その中で、「空間的な方向性の対立があると反対語意識は強くなる」(1996:98)など、興味深い指摘を行っている。このような調査は、先のクルーズの仮説を検証するのに有効なものと考えられる。

なお、反義語らしさに関しては、ミュライゼンが、その意味的範囲(range)が一致しているものほど反義語らしいとしている(Muehleisen 1997)。これは、形容詞のペアに関して、それが修飾しうる名詞の範囲にずれがある場合があることに基づいて、そのようなずれの少ないものが反義語の良い例としたものである。このような「範囲」は、多義性の問題も絡んでおり、扱いは難しい。また、彼女の言う反義語の良い例とは、荻野・野口のいうような「どの程度はっきり反義語と認識されるか」という意味での反義語らしさとは異なるものであるように思われる。

### 3. 実験

反義性における程度性について考察するため、以下の実験を行った。目的は、1) 英語において反義性に程度があることを調べること、及び、2) どのような単語ペアが高い反義性の程度判断を得るかを調べ、それに貢献する要因を探ることである。その中で、クルーズの仮説についても取り上げる。

#### 3.1. 実験

英語の43の単語ペアを選び、それがどれぐらいはっきりと意味が反対だと感じられるかを、5段階で評価してもらう実験を行った。被験者はアメリカ英語話者の大学生18名である。実験は調査票に記入してもらう形で行われ、各単語

ペアの横に書かれた5段階スケールの該当箇所にマークを記入してもらった。具体的な指示文は以下の通りである。

There are many word pairs in English, like *man and woman*, *table and chair*, and *bed and breakfast*. Some pairs consist of words that are opposite in meaning, while others are not. There may be some pairs which you find may be regarded as opposite but are not clearly so. Consider the following word pairs and judge the degree of “oppositeness” you find in each pair and plot it in a 5-point scale from “Clearly Not Opposite” to “Clearly Opposite”.

各被験者の回答から、反義語らしさの程度を最大値を1、最小値を0に換算して平均を求めた。結果は表1に示す通りである。

### 3.2. 考察

この結果からどのようなことが言えるであろうか。まず、荻野・野口の結果と同様に、英語においても反義性に程度があることが確かめられたと言える。このことは、多くの他の言語範疇と同じように(Taylor 1989)、反義性にも典型性が存在していることを示している。

個々の単語ペアの反義語らしさの判断からわかることとして、構造意味論において代表的な反義語として扱われてきた二項対立による相補的な反義語が、必ずしも高い反義語らしさの判定を受けたわけではないことがある。相補的なペアであるman/womanは比較的高い判断を得ているが、それでもgood/badなどの尺度形容詞ほどには高くない。逆に、構造意味論では扱いにくかったbuy/sellの方が高い評価を得ている。

さて、Cruseの仮説についてはどうであろうか。まずは、二項対立の内在性である。ここでは「内在的」かどうかの判断を、「論理あるいは自然の摂理により、二つしか存在しない」場合か、「社会の実状あるいは社会の取り決めにより、二つしか存在しない」場合か、という対立と考えて議論を進める。今回の結果においては、全体的に見れば、内在的二項対立をなすペア(man/woman, father/mother, singular/plural, rooster/hen, actor/actress, animal/plant, stereo/monaural)の方が非内在的な二項対立のペア(weekday/weekend, singles/doubles, Senate/House of Representatives, single-decker/double-decker)よりも反義語らしさの程度判断は高かった。しかし、すべてのペアを通して言えることではなく、stereo/monauralとanimal/plantは、weekday/weekendよりも反義語らしさが低く、singles/doublesとほとんど差がない。また、内在的二項対立をなすペアと二項対立をなさない

good/bad	1.00	heaven/earth	0.66	mother/daughter	0.43
happy/sad	0.98	one-way/round-trip	0.65	father/son	0.40
simple/complex	0.98	sun/moon	0.65	table/chair	0.39
above/below	0.97	weekday/weekend	0.61	blue/yellow	0.38
buy/sell	0.94	spring/fall	0.58	pen/pencil	0.38
kind/cruel	0.93	read/write	0.57	place/time	0.36
start/finish	0.92	actor/actress	0.56	computer/pencil	0.32
man/woman	0.86	town/country	0.54	tea/coffee	0.32
father/mother	0.78	animal/plant	0.53	Senate/House of Representatives	0.31
singular/plural (in grammar)	0.74	father/daughter	0.53	single-decker/ double-decker (bus)	0.29
sit/stand	0.74	stereo/ monaural	0.53	book/magazine	0.24
summer/winter	0.72	red/green	0.50	cup/glass	0.18
rooster/hen	0.69	mother/son	0.49	table/desk	0.17
head/toe	0.68	reading/listening	0.46		
round/square	0.68	singles/doubles (in tennis)	0.46		

表 1 反義性の程度

ペア(summer/winter, round/square, spring/fall, town/country)とを比較しても、stereo/monauralとanimal/plantは、非二項対立をなすsummer/winter, round/squareより反義性の程度が低い。

クルーズの言う「対立の純粋性」に関しても、結果は必ずしも明確ではない。性差で対立する諸ペアを比較すると、man/woman, father/mother, rooster/hen, actor/actressの順で反義性の程度が下がる。示差的特徴の観点からすれば、man/womanとrooster/henはそれぞれ、性差の特徴の他に人間か鶏かという種類に関する特徴が加わっている。その点では「対立の純粋性」には差がないはずである。

これらの点は、「内在的二項対立」や「対立の純粋性」がたとえ関与していたにせよ、それのみでは説明できない「反義語らしさ」の要因が存在することを物語っている。

それがなにであるかを考えるヒントになるのは、summer/winterとspring/fallの差である。この二つでは前者の方が後者よりも反義語らしさが高い判断されている。これはどうしてであろうか。その理由は、夏と冬が暑いか寒いかという

対立の軸の中に置かれるのに対して、春と秋にはそのような対立の要素がないからだと思われる。この観点から内在的二項対立をなすもので反義語らしさが低かったstereo/monaural、animal/plantを考えると、summer/winterに見られるような、同一軸での対称的な特性はないか、あってもすぐには思いつきにくい。

このような対立の有無の判断は、結局のところ、動物、植物、夏、冬などに関わる私たちの知識によるものである。このような知識も意味の問題に重要な役割を果たしているのである。このことは、いわゆる「百科事典的知識」が意味の一部であるとする、認知意味論の立場を支持するものである。

反義性の程度の判断に貢献していると思われる要因に、空間的な方向性の違いがある。今回のデータで、0.9以上の高い反義語らしさの判定の得られたペアには、above/belowのように反対方向の空間的方向性を表すものが含まれている。このほか、buy/sellでは、主語の指示物から見た物品の移動の方向性が反対方向であり、また、start/finishにおいては、無活動から活動状態へか、その逆か、という方向性の違いが見出される。また、good/badなどの尺度形容詞に関しても、尺度上の方向性の違いがある。

このような方向性の対立は他の語の反義性の程度にも関わっているように思われる。read/writeがreading/listeningよりも反義語らしさが高い理由も、前者には方向性の対立が含まれているからではないか、と思われる。また、性別に関するペアについてもhじょうこうせいからの説明が可能である。man/womanには、互いにパートナーとして近づいていく方向性があると考えられる。そのような互いに近づいていくような方向性は、rooster/henやactor/actressではさほど感じられない。

このような説明は、「反対方向の方向性がどれくらい顕著に含まれているか」に関する程度判断と反義語らしさの程度判断との相関を見ることによって、統計的にも実証されるものと思われる。

#### 4. 結論

本論では、認知意味論的な立場から反義性の問題を考察した。反義性には程度があること、その判断には事物についての一般的な知識が関与しており、また、方向性の有無が重要な働きをしていることを指摘した。このことは、構造意味論が得意としていたはずの反義性の理解においても、認知意味論的な見方が有効なものであることを示している。

## 注

\*本研究は、平成17-19年度科学研究費補助金(萌芽研究)課題番号 17652047「反義性の認知意味論的研究」の一環として執筆されたものである。本論文で報告した実験に関しては、アリゾナ州立大学(当時)の大島義和氏にご協力いただいた。

## 参考文献

- Croft, William, and D. Alan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, D. Alan 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, D. Alan 1992. Antonymy revisited: some thoughts on the relationship between words and concepts. In Adrienne Lehrer and Eva Feder Kittay (eds.) *Frames, Fields, and Contrasts: New Essays in Semantic and Lexical Organization*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. 289-306.
- Cruse, D. Alan and Pagona Togia. 1995. Towards a cognitive model of antonymy. *Lexicology* 1: 113-141.
- Fillmore, Charles J. 1982 Frame Semantics. In Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*. Seoul: Hanshin. 111-138.
- Geckeler, Horst. 1971. *Strukturelle Semantik und Wortfeldtheorie*. München: Fink.
- Jones, Steven. 2002. *Antonymy: A Corpus-based Perspective*. London: Routledge.
- Justeson, John S. and Slava M. Katz. 1991. Co-occurrences of antonymous adjectives and their contexts. *Computational Linguistics* 17: 1-19.
- Justeson, John S. and Slava M. Katz. 1992. Redefining antonymy: The textual structure of a semantic relation. *Literary and Linguistic Computing* 7:176-184.
- Leech, Geoffrey N. 1974. *Semantics*. Harmondsworth: Penguin.
- Lyons, John. 1968. *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, John. 1977. *Semantics*, vol. 1. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mettinger, Arthur. 1994. *Aspects of Semantic Opposition in English*. Oxford: Clarendon Press.



- Muehleisen, Victoria. 1997. *Antonymy and Semantic Range*. Ph.D. Dissertation, Northwestern University.
- Palmer, Frank R. 1976. *Semantics: A New Outline*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Paradis, Carita. 2001. Adjectives and boundedness. *Cognitive Linguistics* 12: 47-64.
- Taylor, John R. 1989. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.
- Vogel, Anna. 2004. *Swedish Dimensional Adjectives*. Doctoral thesis, Stockholm University.
- Willners, Caroline. 2001. *Antonyms in Context*. Lund: Lund University.
- 荻野綱男・野口美和子 1988. 「辞書における反対語記述の問題点」 『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究－9——IPAL(Basic Verbs)をめぐって——』 情報処理振興事業協会, 119-171.
- 荻野綱男・野口美和子 1996. 「反対語意識の構造」 『日本語研究』 16: 78-111.